

発達 7-1

たくましい社会性に関する縦断的研究 (1)

○二宮 克美・首藤 敏元・山岸 明子
(愛知学院大学教養部) (埼玉大学教育学部) (順天堂医療短期大学)

【目的】二宮・山岸・首藤(1995)は、たくましい社会性を「円滑な対人関係がとれ、他者との関係を築き、維持・発展させ、その中で自己の要求を実現できる能力」と定義し、小学校5年生と中学校2年生を対象に実施した調査結果を報告した。その中で、中学校2年生のほうが小学校5年生よりも「たくましい社会性」が低いこと、中学校2年生のほうが孤独感が強く、学校への好意度が低いこと、などを指摘した。

こうした結果は、横断的データによるものであり、対象としたコーホート特有のものである可能性もある。そこで、当時小学校5年生であった者たちが中学校1年生になった時点で、再度同じ調査を実施した。今回の報告は、二度のいわゆる縦断的調査の結果を報告するのが目的である。報告(1)では、小学校5年生から中学校1年生にかけての、共感性、向社会的コンピテンス、向社会的行動経験の3つの側面についての発達的变化の分析結果を報告する。

【方法】<質問項目> (1)共感性:「泣いている子を見ると自分まで悲しくなる」などの7項目を用意し、「よくあてはまる」から「ぜんぜんあてはまらない」までの5段階評定を求めた。(2)向社会的コンピテンス:「悲しそうにしている人はげますことができる」などの10項目に対して、5段階評定を求めた。(3)向社会的行動経験:「けがをした人を助けたことがある」などの8項目に対して、「たくさんしたことがある」から「一度

もしたことがない」までの4件法でたずねた。

<被調査者> 1994年1月当時に、小学校5年生で本調査を受けた者で、1996年1月現在で中学校1年生に在籍し、再度この調査を受けた者 388名(男子 198名、女子 190名)である。

【結果 および 考察】

(1)共感性: 学年×性別の2元配置の分散分析の結果、学年($p < .01$)ならびに性別($p < .001$)の主効果が認められた。学年の上がるにつれ、共感性が高くなること、男子よりも女子のほうが共感性が高いことがわかる。横断的データでは、学年の上がるにつれ得点が下がっていたが、今回の縦断的データでは、得点が上昇していた。

(2)向社会的コンピテンス: 分散分析の結果、性別の主効果のみが認められ($p < .001$)、女子の得点が高かった。横断的データでは学年差が見られたが、縦断的データでは認められなかった。

(3)向社会的行動経験: 学年($p < .001$)ならびに性別($p < .01$)の主効果があった。小5よりも中1の得点が低く、男子よりも女子の得点が高かった。この結果は、横断的データと同じである。

(4)3つの尺度の小5-中1の時点間相関係数を算出した。男女ともにすべて有意な正相関があった。

(5)3つの尺度得点から言えることは、共感性、向社会的コンピテンス、向社会的行動経験ともに、男子よりも女子のほうが高いことである。共感性は学年とともに高くなるものの、向社会的行動経験は、学年のあがるにつれ減少すると言える。

表1. 学年別・男女別の平均値(標準偏差)

		A 共感性	B 向社会的コンピテンス	C 向社会的行動
小	男子	22.55 (5.26)	29.58 (6.10)	18.49 (4.62)
	女子	25.56 (4.04)	31.18 (5.52)	19.44 (4.65)
	合計	24.02 (4.93)	30.36 (5.87)	18.95 (4.65)
中	男子	23.41 (5.13)	28.90 (5.97)	16.78 (4.09)
	女子	26.15 (4.67)	31.40 (5.21)	18.18 (4.28)
	合計	24.75 (5.09)	30.11 (5.74)	17.46 (4.23)

表2. 3尺度の時点間相関係数

	男子	女子	全体
A	.498***	.445***	.518***
B	.577***	.480***	.548***
C	.462***	.442***	.460***

<引用文献> 二宮・山岸・首藤 1995
たくましい社会性を育てる 祖父
江孝男・梶田正巳(編)『日本の
教育力』Pp26-50. 金子書房